

第Ⅲ部 考 察 篇

第1章 北白川追分町遺跡出土の縄文土器

第2章 北白川追分町遺跡の堆積環境の変遷

第3章 北白川追分町遺跡の古植生の復原

第1章 北白川追分町遺跡出土の縄文土器

泉 拓良 家根祥多

本遺跡で出土した縄文土器は前期から晩期までの諸型式を含んでいる。しかし、その多くは中期末および晩期末の土器であって、そのほかは数点ないし数十点とごくわずかである。個々の土器については第Ⅰ部第3章で説明をおこなったので、ここでは出土量が多い資料で、かつ編年の確立をみていない中期末の土器と、環境復原をおこなえた泥炭質層の年代を決定するのに必要な晩期末の土器について考察を加えようとするものである。

1 中期末縄文土器の分析

第Ⅰ部第3章で中期末～後期初頭の土器としたもののうち、後期初頭すなわち中津式に含みうる土器は、深鉢A6類に一部含まれているだけと思われる。c5Ⅰ区、c5Ⅱ区、b4Ⅳ区で計算した総個体数に対しては、中津式は数%しか影響を与えないので、一応数値上では無視したことにして分析をおこなった。

分類・分析の方法 中期末の土器分類法は、すでに第Ⅰ部第3章において述べたように、器形の大きな違いで、深鉢と浅鉢とに分類し、それぞれを口縁部の表出技法や文様帯の位置などで器種に細分した。そして器種の中における共時的多様性と年代の変遷とを、施文手法と文様意匠との組み合わせによる「文様」によって識別する。これによって器種ごとの型式学的序列を与え、同じ「文様」の共有によって器種どうしの共時性を証明する。この型式学的組み合わせを、遺構一括遺物や、遺跡や地点による引き算によって、編年へと昇化させたい。

深鉢A類の分析 第Ⅰ部第3章で述べたように、深鉢A類は器形の上で1～6類に細分し、その各々を文様でさらに細分した。ここではその細分にもとずき、それぞれの型式学的序列を与える(図97)。A1類は加曾利E式・曾利式などの東日本の土器型式と最も共通する点が多い。そこで加曾利E式の文様変遷を参考としながら、その位置付けをおこなった。A1類aは筆者のいう凸帯渦巻文B種であり、⁽¹⁾里木Ⅱ式に併行する東日本の土器である。他の器種にこの文様はなく、搬入品と考えるのが妥当である。

A1類bは加曾利E式の第5段階に見られる文様構成をとる。⁽²⁾この類の中でも38は渦巻部の隆帯の終りと沈線の終りとが一致しているのに対して、43・58の順に沈線の渦巻文が

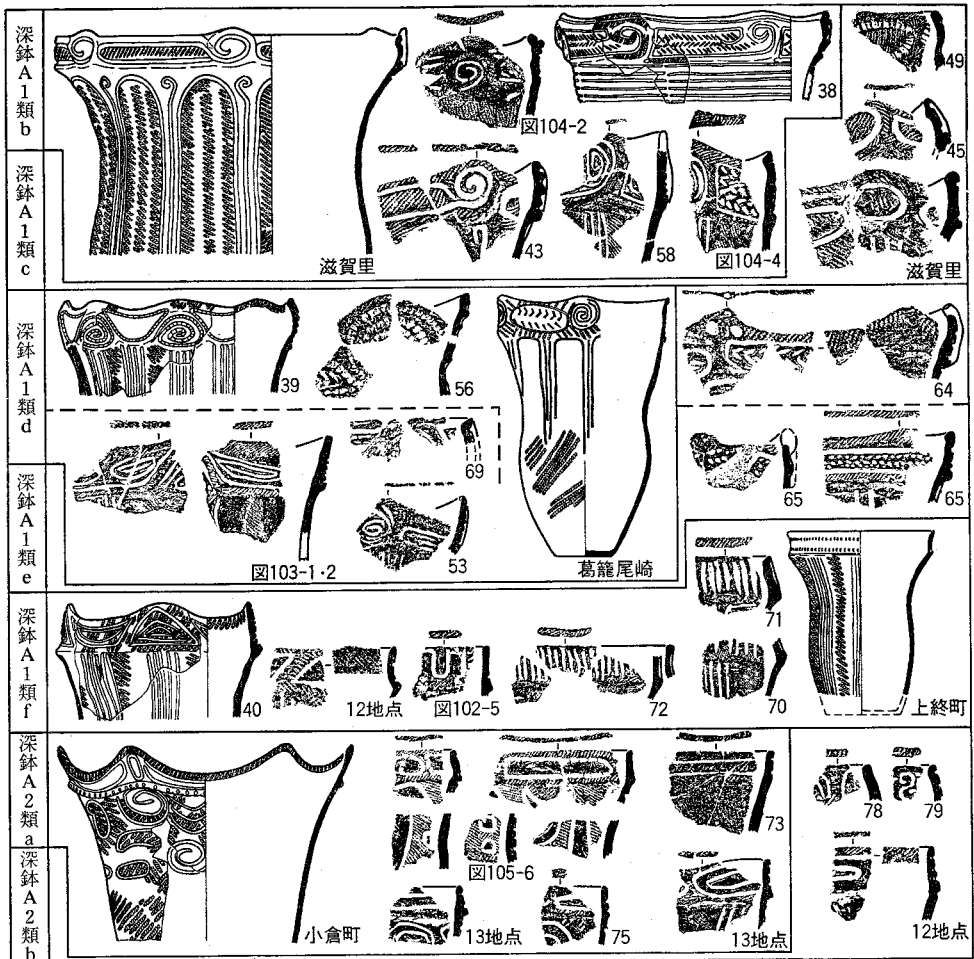
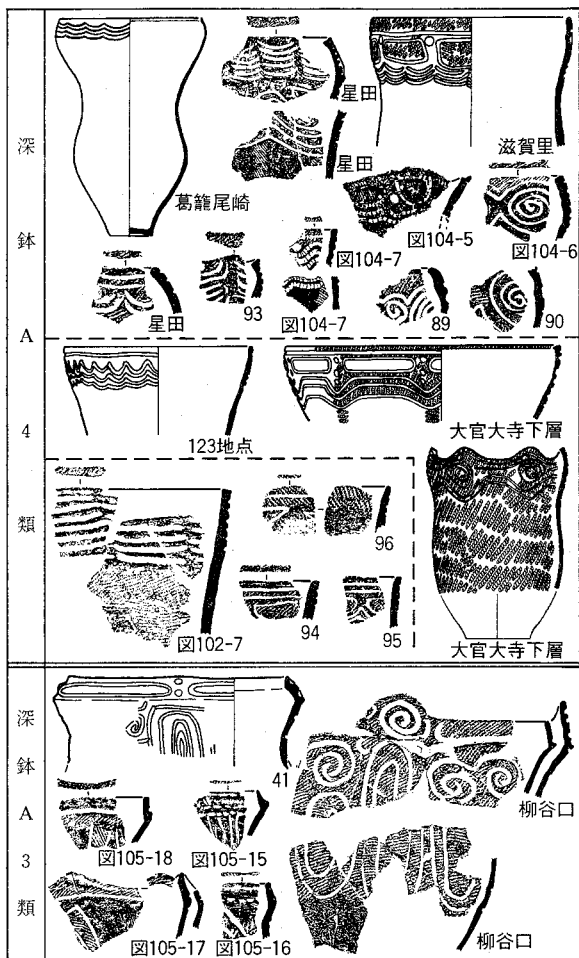


図97 縄文中期末深鉢A類土器の変遷 縮尺不同（葛籠尾崎遺跡出土資料は小江慶雄「琵琶湖の湖底遺跡」『京都教育大学紀要 A』第30号，1966年，大官大寺下層遺跡出土資料は奈良国立文化財研究所

深く渦巻くようになり，隆帯の形態を除くとA1類dと区別ができなくなる変化がある。

A1類cも加曾利E式の第5段階に文様の類似を求めることができる土器である。49のように区画内に縄文を縦走向に施す特徴も東に類例がある。この類の土器には区画内に羽状沈線を充填するものがなく，引き算的にA1類bに併行すると考えられる。

A1類dは，A1類bの隆帯が円形に囲むようになり，すでに独立を強めていた渦巻文が区画文から切り離された文様になったものと説明できる。また隆帯が囲むように変化した原因をA1類cの文様の交流とすることもできよう。区画文の幅と，充填している羽状沈線文の手ぬきから，56から53への変化を想定できる。



『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』8, 1978年による。その他本調査区以外の土器は、玉田芳英・泉拓良の実測による。

なり磨消縄文も目立つ。

A 3類は丹後地方, 山陰地方におもに分布する土器である。薄手で口縁部が鋭く屈曲する土器で器壁内面に文様施文のため生じた凹凸が著しい。胴部には渦巻文と縦長の渦巻文を配している。41は丹後地方からの搬入品の可能性がある。しかしその他の土器は本遺跡で製作されたものである。紡錘形の磨消縄文帯をもつ土器(図105-17)は天理市布留遺跡⁽³⁾, 笠岡市津雲貝塚などに類例があり, 中津式の成立と係わる土器である。

A 4類は従来星田式と呼ばれていた土器を主体とする。里木Ⅱ式の伝統と思われる連弧文を特徴とし, 胴部に垂下沈線をもたないのも特徴となる。キャリパー形の器形が徐々に

A 1類eはA 1類bの渦巻文が省略され, 隆帯だけが残ったものである。64は口縁部文様の幅がひろく, 羽状沈線文も「ハ」字形の筆順であるが, 65は区画文の幅が狭くて区画内も刺突文充填であり, 退化を読み取れる。

A 1類fはA 1類dの隆帯を省略しただけの土器(40)と, 新たに出現する口縁部文様が短直線文様(70~72)や蛇行文からなる土器とである。後者は胴部文様からだけA 2類と区別できる。

A 2類は本調査での出土は少ない。口縁部は幅が狭くなり, 隆帯はA 1類fと同様, 口縁部と胴部との境に痕跡的に残る。口縁部全体を肥厚屈曲させた土器もこの類に含まれる。口縁部が区画文からなるA 2類aと, 曲線文からなるA 2類bにわかれる。胴部文様は曲線文が主と

屈曲のないずん胴な器形へと変化した。文様では連弧文、区画文、双頭渦巻文の3種類にわかれ、それぞれに変遷が迎えられる。

A 5類はA 1～A 4類と比べて器壁は薄く、調整も丁寧で小型の器形になると思われる。104のような「ハ」字形筆順の羽状沈線文の土器は古相を呈し、100のような羽状沈線文のなごりを留める刺突文を経て、刺突文土器へと変化した。

A 6類を型式学的に位置付ける材料はない。108についてだけA 5類との系譜が考えられるがそれ以外についてはA 4類系の資料の増加を待ちたい。

深鉢B類の分析 深鉢B類は楕円形区画文のつなぎ部の形態から2類に細分した。橋状把手になるものがB 1類、突起となるものがB 2類である。これはいわゆる退行器管の類推からB 1類が古くB 2類が新しいと想定できる。各類の細別は楕円形区画内の文様でおこなった(図98)。B 1類aは隆帯の楕円形区画内を、沈線でさらに楕円形に区画し、中に「ハ」字形筆順の羽状沈線文を充填する土器である。129のように楕円形区画上から強く外反する口縁はB 1類bやB 2類には見られない特徴であり、もしこの器種の祖型を例え(5)ば岐阜県各務原市炉畑遺跡の第IV群2類土器(5)のような土器とするならば、B 1類aの中で

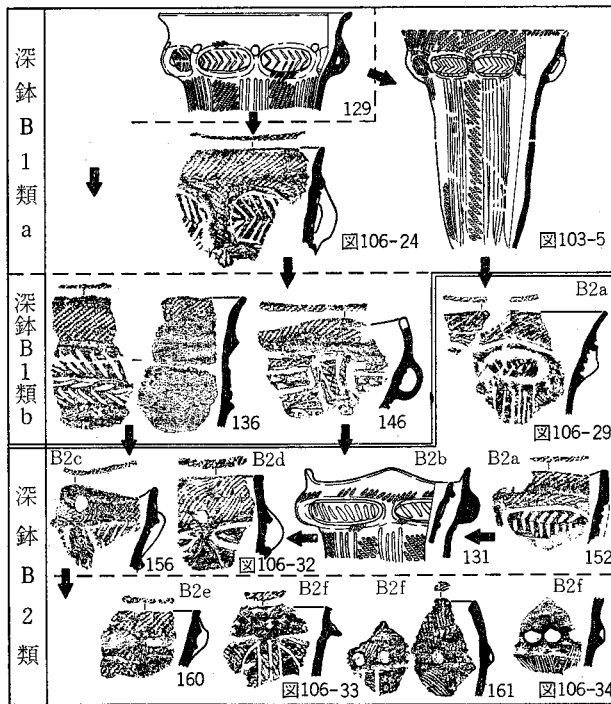


図98 縄文中期末深鉢B類土器の変遷 縮尺不同

最も古い土器の特徴となる。B 1類bは「く」字形筆順の羽状沈線文を充填する土器と楕円形区画沈線が省略された土器であり、B 1類aに後続する。通常無文となる口縁直下の部分に文様を施す土器は、B 1類に限って存在する。132の区画内羽状沈線は、「ハ」字形筆順で、口縁下には同心円文と区画文を配すが、135は「く」字形筆順の羽状沈線で、口縁下の文様の区画文は1条の沈線に退化しており、B 1類のa・bに対応する。B 2類にも時期的変化が認

められる。楕円形沈線区画があって「く」字形筆順の羽状沈線を充填するB2類aを原型に、羽状沈線が短直線になったもの(b)と、楕円形区画が省略されたもの(c)、楕円形沈線区画だけとなったもの(d)と分化し、本類の基礎である隆帯による楕円形区画だけになったもの(e)、さらに1条の凸帯と化したもの(f)などの文様退行現象が認められる。

深鉢C類の分析 深鉢C類の祖型はおそらく長野県高森町増野新切遺跡D14号住居跡出土1番⁽⁶⁾のような土器と考えられるが、直接的な系譜は明確にしえない。「く」字状に内折した口縁部の文様からA類の変遷を参考にして3類に細分した。しかし本類は文様の中心が口縁部から胴上部に移る土器であってA類の変遷とは対応しにくい(図99)。

C1類は口縁部に楕円形区画文を施す土器である。C1類aはA1類bと同様の隆帯と沈線とで渦巻区画文を描く土器(179)であり、C1類bは楕円形区画間を沈線だけで表す土器である。ただし、182は楕円形区画間に隆帯が突起状に残っている例である。C1類bは185のように楕円形区画内に「ハ」字形筆順による羽状沈線文土器があり、A類や

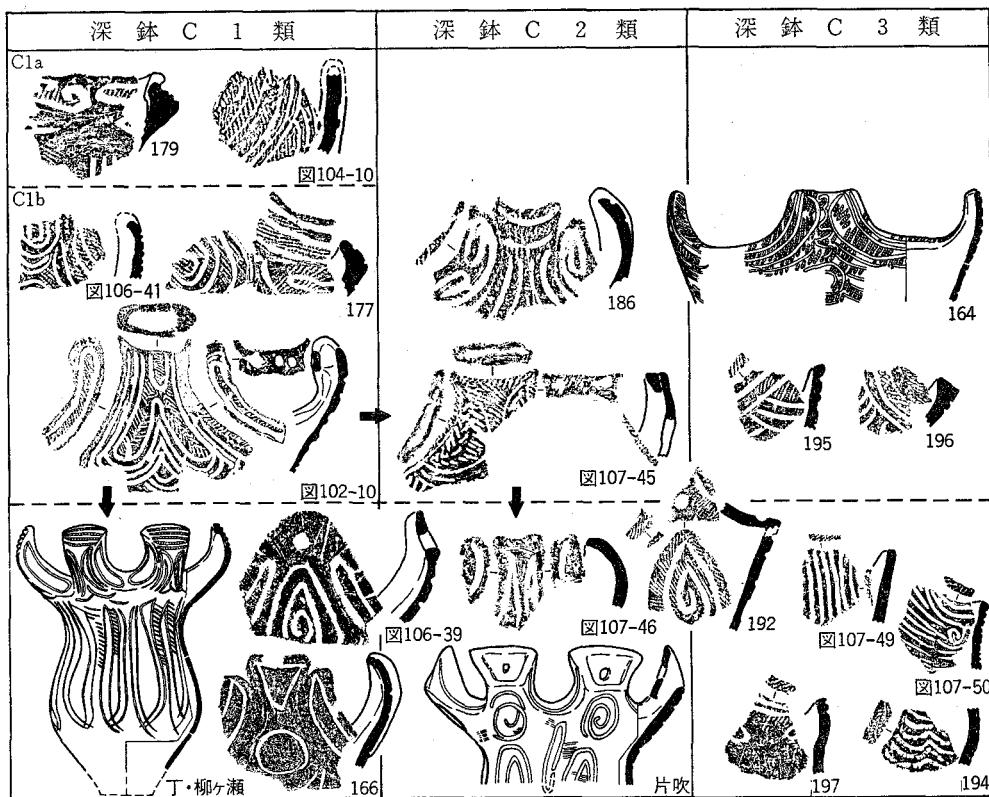


図99 縄文中期末深鉢C類土器の変遷 縮尺不同(丁・柳ヶ瀬遺跡は家根、片吹遺跡は玉田実測)

B類の変化より早く隆帯を消失するのであろう。

C 2類は渦巻区画文が横「C」字文に変化したC 2類 aの186を原型とする、口縁部に1条の沈線を施す土器。C 3類は口縁部が無文となる土器で、C 1・C 2類の口縁部文様が胴上部に移動した土器と考えることができる。

C 1類 a・bを除き、その編年的細分には困難を伴うが、山形口縁下の文様は渦巻文と区画文ないし多条沈線文に限られている。古相を示すと考えられる187の文様構成をみると渦巻文とそのまわりに区画文を配するようであり、それが渦巻文だけの土器、区画文だけの土器へと変化したと想定できよう。たとえば、192の土器は渦巻のタッチや器壁がA 3類の86と酷似しており、新しい様相の土器となり、上記の想定も首肯できるであろう

浅鉢A類の分析 浅鉢では唯一深鉢と共通の文様をもつ器種である。文様から4類に細分したが、ここでは1～3類について分析する(図100)。

主文様部を隆帯で囲む土器はA 1類 a, A 2類 a, A 3類 aである。A 2類 aは楕円形区画内に「ハ」字形筆順の羽状沈線文を充填しており、深鉢A 1類 dと類似する。A 1類 aはつなぎ部には主文様の脇に渦巻文、その横に区画文を多段に施す土器で、後述する北白川追分町遺跡BF33区SB2の深鉢に類例がある。

口縁部に隆帯のない土器のうち、多重沈線で文様を描くA 1類 bは、A 1類 aの隆帯が消失し、主文様の脇の渦巻文が多重楕円形区画文に変化した土器である。A 2類, A 3類にも隆帯だけが消失したA 2類 b, A 3類 bがある。A 2類, A 3類には、口縁部が縮小したA 2類 cとA 3類 cがあり、都合3期に浅鉢Aをわけることができる。

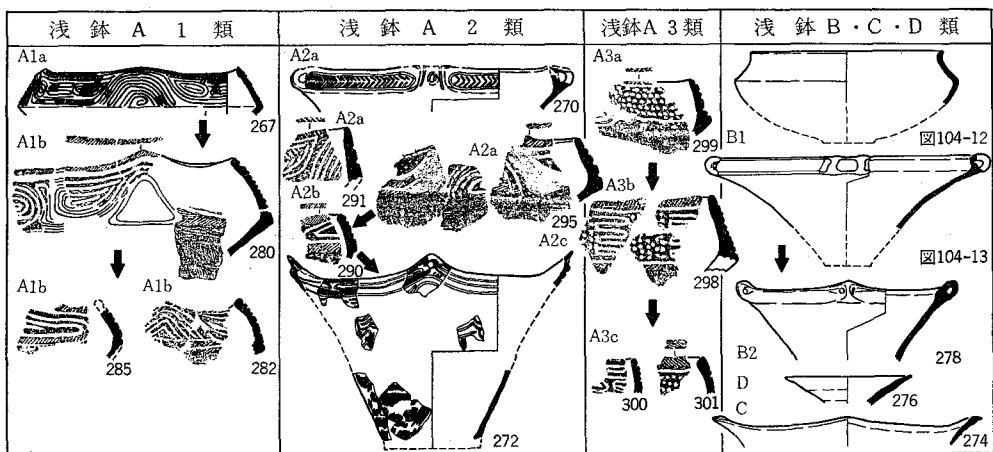


図100 縄文中期末浅鉢の変遷 縮尺不同

浅鉢B類の分析 無文研磨の浅鉢のため、細分は困難であるが、口縁部の幅が他の器種では広いものから狭いものへと変化する傾向を示しており、ここでも幅の広いB1類からB2類へと変化したと考えられる。またB類には橋状把手を口縁に有する土器があり、浅鉢A類に分類した270が明確な橋状把手を持つものに対して、B2類の橋状把手は突起部にまず作ってから穿孔する技法で製作されたもので退行を認めることができる。

以上細分が可能であった深鉢と浅鉢について分析をおこなった。その他の器種は細分する手掛りはあるものの、型式学的順列はつけにくく、後の共伴関係の検討の中で編年的位置を与えることにする。

(1) 器種の組合わせ (図101)

器種をこえて共通する文様は多くなく、隆帯と口縁部表出技法との関係、羽状沈線文、橋状把手、多重区画文の4種類である。この4種類から器種の併行関係をみる。

隆帯区画 この文様の中で古い特徴は、隆帯と沈線とで渦巻区画文を描く土器であり、深鉢A1類bと深鉢C1類aにある。次にくる隆帯で渦巻文の主文様を囲む文様は深鉢A1類d、浅鉢A1類a・A2類a・A3類aに認められる。口縁と胴部の区画隆帯が主文様部で立上る器種は深鉢A1類e。深鉢A1類d・eは羽状沈線で2期に細分できる。

羽状沈線文 口縁部の文様として用いられる横位の羽状沈線文は、先に述べたように、筆順に2種類ある。「ハ」字を書くように斜線を対称的に書く手法(「ハ」字形筆順)と、「く」字を書くように斜線を連続して書く手法(「く」字形筆順)である。当然「ハ」字形筆順から「く」字形筆順へ手ぬき化したものと考えられる。さらに退化して短直線になっ

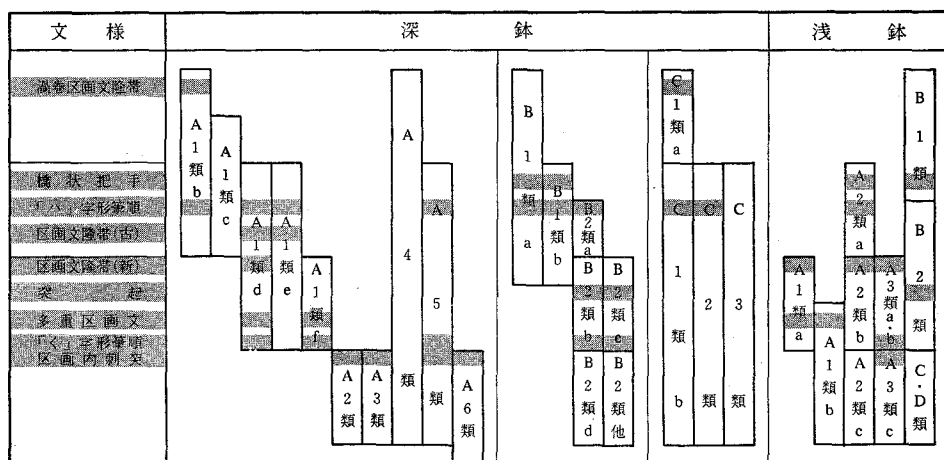


図101 縄文中期末の器種の組成

たものや、刺突状になったものもある。「ハ」字形筆順の羽状沈線文は深鉢A 1類ではb・d・eに、深鉢A 5類、深鉢B 1類a、深鉢C 1類b、浅鉢ではA 2類aなどにみられるが、「く」字形筆順の羽状沈線文は、深鉢A 1類d・e、深鉢B 1類bと深鉢B 2類a・cに施されており、より新しい他の要素と結びついている。刺突状になった羽状文は、深鉢A 1類e、深鉢5類、浅鉢A 3類a・bに施されている。羽状沈線文だけによる併行関係は危険を伴うように思われるが、深鉢A 1類bおよび深鉢B 1類aには「ハ」字形筆順しか認められない点は、他に比較する要素のない深鉢B類の併行関係を知る上で重要である。ただし「ハ」字形筆順羽状文は中期最終末まで残る例はある。

橋状把手 橋状把手をもつのは、深鉢B類と浅鉢A類・B類である。深鉢B 1類の橋状把手と「ハ」字形筆順羽状沈線文の組み合わせは、浅鉢A 2類aにも認められる。浅鉢B 1類には北白川追分町遺跡の昭和31年採集資料中に、橋状把手をもつ例があり(図104-9)、B 2類の突起を作って穿孔し橋状把手状にした土器、B 3類の突起だけの土器へと変化したと考えられる。このように考えると、浅鉢B 1類は深鉢B 1類に、浅鉢B 2・3類は深鉢B 2類に対応すると思われる。

多重区画文 この文様は浅鉢A類に典型的にみることができ、主文様部脇の渦巻文をもつものと、楕円形区画文を2本以上の沈線で表現するものにわかれる。脇の渦巻文は北白川追分町遺跡BF33区SB 2出土例の深鉢A 1類d(図103-1・2)と、他は浅鉢A 1類aである。深鉢B 1類aの134もこの文様の可能性があり、また同類の132の2段に楕円形区画文を配す文様は、脇の渦巻文をもつ浅鉢のA 1類aの267にもあり、同時期になる可能性を示す。多重楕円文は深鉢A 1類fと浅鉢A 1類bにみられる文様であり、モチーフもよく類似している。

以上のような器種をこえた文様の類似をもとにし、前節で分析をおこなった各器種の型式学的序列が、器種間でどのように組合わさるかを示したのが図108である。

(2) 北白川遺跡群出土の中期末縄文土器

大正12年の北白川追分町縄文遺跡の発見⁽⁷⁾以後、北白川小倉町遺跡⁽⁸⁾、北白川上終町遺跡⁽⁹⁾、北白川別当町遺跡⁽¹⁰⁾の発見と、白川扇状地上で次々と縄文遺跡が発見され、発掘調査も京都大学構内にある北白川追分町遺跡を主に数多く実施されてきた。その中には、縄文中期末の土器も数多くあり、とくに北白川上終町の石囲炉の中から発見された土器や北白川小倉町遺跡から発見された土器は有名である。ただし、遺構からまとまって出土したのは昭和57年に清水芳裕が発掘した北白川追分町遺跡BF33区の堅穴住居跡SB 1とSB 2出土遺



図102 北白川追分町遺跡B F 33区SB 1出土土器（2～4・6・8・11は昭和51年出土土器）

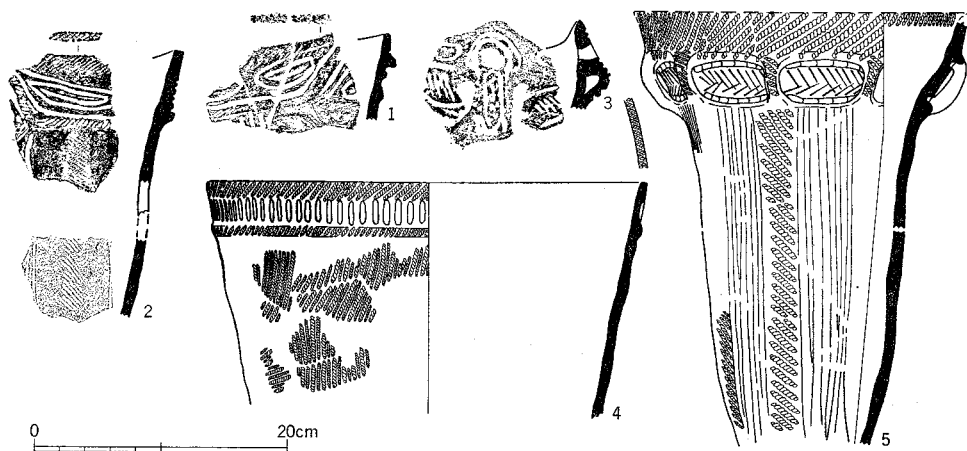


図103 北白川追分町遺跡B F 33区S B 2出土土器

物である(図102・103)⁽¹¹⁾。また、昭和48・49年に中村徹也が発掘した北白川追分町B E 33区B E 32区の資料(図105~107)⁽¹²⁾、昭和31年の北白川追分町遺跡採集資料(図104)も編年上興味ある資料である⁽¹³⁾。ここではこれらの資料を先の分類にもとづいて検討し、今回出土した土器の編年的考察の資料とする。

北白川追分町遺跡B F 33区出土土器 堅穴住居跡以外からも多くの縄文土器が出土しているが今回はS B 1とS B 2から出土した土器に限って考察する。

S B 1からは、深鉢はA 1類d(1~3), A 1類e(4), A 4類(7・8), C 1類b(9・10)が出土し、浅鉢はA 1類a(11), B 2類(13), B 3類(12)が出土した(図102)。S B 1出土の深鉢胴部片はほとんど垂下沈線文をもち、A 1類の胴部片である。文様をみると、2~4・10は「ハ」字形筆順の羽状沈線文であるが、1・5・6・11は蛇行沈線文充填であり、新旧2期の文様が共存している。

S B 2からは、深鉢はA 1類d(1・2), A 1類f(4), B 1類a(5), B 1類b(3), 浅鉢はB 2類が出土した(図103)。1・2は主文様の脇に渦卷文がある深鉢A 1類dでは新相の土器であり、5も口縁に外反のみられないB 1類aの新相を示す土器である。

S B 2の土器出土状態は、床面から20cmほど上部にまとまって出土するという状態であって、必ずしも住居跡に伴なう一括遺物とはいえない。しかし今回の調査で多く出土した深鉢A 1類aとA 1類dの古相の土器はなく、また、A 2類・A 3類も認められないことから、ほぼ同時期の資料とみてさしつかえないものであろう。

北白川追分町遺跡昭和31年採集土器 深鉢は、A 1類b(1~3), A 1類c(4), A 4類

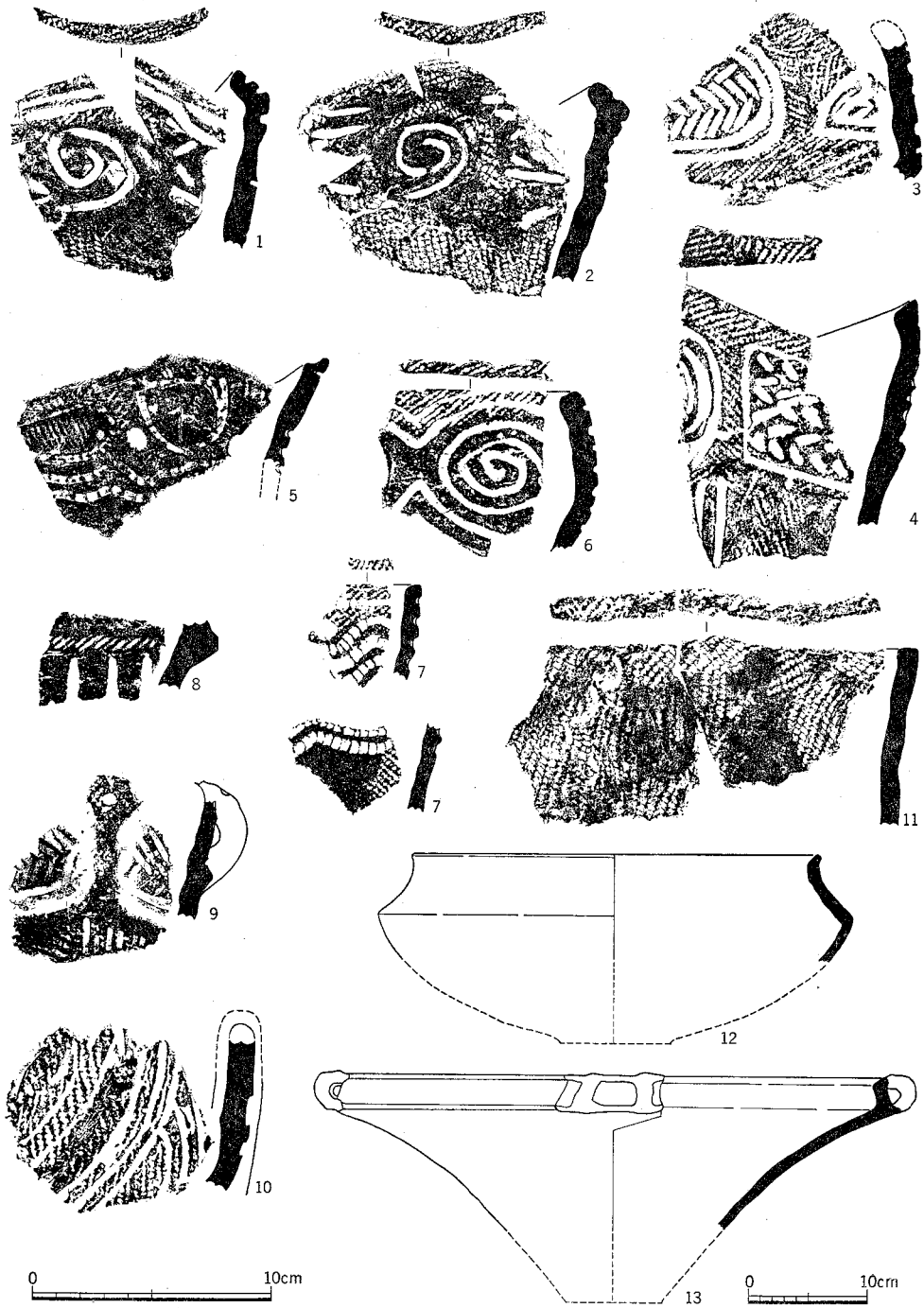


図104 北白川追分町遺跡昭和31年採集土器



图105 北白川追分町遺跡 B E 32・33区出土土器(1)



図106 北白川追分町遺跡 B E 32・33区出土土器(2)



図107 北白川追分町遺跡B E 32・33区出土土器(3)

(5～7), B 1 類 a (9), C 1 類(10)からなり, 浅鉢は, B 1 類(12・13)である(図104)。A 1 類 c とした土器は楕円形区画内に羽状沈線文があり他の A 1 類と趣きを異にしている。C 1 類は器壁の厚い土器で C 1 類 a の可能性が強い。この昭和31年採集資料は4の土器が主文様部の渦巻文が多重になってやや新しい様相をもつものの, 時期幅の少ない資料の可能性が強く, 最も古い一群として位置付けられる(図 108)。A 4 類の併行関係も重要な資料である。

北白川追分町遺跡 B E 32・33区出土土器 隣接する2地点の発掘資料であり, 出土した資料に時期差はないので, 代表的な土器を網羅して作成した B E 32区出土の資料についてここでは検討する。なお深鉢 D 2 類だけは B E 33区の資料を使用した。

B E 32区出土土器は, 深鉢 A 類では A 2・A 3 類が6～18と大多数を占め, 他に, A 1 類 a 亜種(1), A 1 類 d (2～4), A 5 類(19～21), A 6 類(22・23)が出土した(図105)。A 2・A 3 類と同時に, 他の地点と比べて A 5・A 6 類が多い点も重要である。深鉢 B 類では, B 1 類 a (24～27), B 2 類 a (29), B 2 類 c (28), B 2 類 d (30～32), B 2 類 f (33～35)が出土した(図106)。B 2 類は全体の70%を占め, さらにそのうち d・f が全体の半数を占める点は他の地区と大きく異なる点である。深鉢 C 類は, C 1 類 b (36～44), C 2 類(44～47), C 3 類(48～50)が出土した(図106・107)。C 1 類 a は出土していないが器種構成の上では他の地区と大差はない。37・41を除き, 他の土器の波頂部下の主文様部が, 区画文や渦巻文のどちらかに限られる特徴がある。浅鉢には, A 1 類 b (53～55), B 2 類(56～58), C 類(59)があり隆帯をもつ浅鉢の欠落は他地点と異なる。これらの土器のほかにも口縁部が肥厚する縄文施文の深鉢 D 2 類(51・52)が出土しており, 他地区にまったく類例がないことから, この類の土器の編年位置を明確にする。

この地区の資料は, 古い時期の資料を若干含んでいるものの, 多くは胴部に曲線的文様をもつ深鉢と, 隆帯のない浅鉢からなり, 中期末の最も新しい様相を示す土器群である。

(3) 中期末の土器編年

型式学的分類・分析をもとに型式序列を考えて器種ごとの項目とし, 同じ北白川追分町遺跡の遺構中, 地点ごとの出土土器の類別を示したのが表22である。昭和31年採集資料でまず1時期が決まる。次に S B 1・S B 2 の資料で1時期が決まり, 前者との中間にくるすなわち今回の資料の主体をなす土器で1時期を認め, 最後にこれらと B E 32・33区の資料との引き算で1時期を画することができる。したがって北白川追分町遺跡では, 中期末の土器を4時期に細分することが可能となったのである。筆者は, かつて, この土器群の

表22 縄文中期末の器種変遷と遺跡・遺構出土土器群の変遷

器種	深										鉢				浅										鉢												
	A A A A A A A A A A										B B B B B B				C C C C				D D		A A A A A A A A A A										B B B			C C C			D
	1 1 1 1 1 2 3 4 5 6										1 1 2 2 2 2				1 1 2 3 1 2						1 1 2 2 2 3 3 3										1 2 3			1 2 3			1 2 3
調査地点	b c d e f										a b a b c 他				a b						a b a b c a b c																
昭和31年採集	●○										○				○						●																
本調査区	○●○○○○○○○○○										●○○○○○				○●○○○●				●●○○○○○○○		○●										○○○○○						
B F 33区 S B 2	◎◎										○○																				○						
B F 33区 S B 1	◎◎◎○														◎																○○						
B E 32・33区	○●●◎										◎○○◎●				●●○○◎				●●												●			○			

● 主体となる器種, ◎ それにつぐ器種, ○ わずかにみられる器種。

表23 中期末縄文土器の器種別個体数

器種	深					鉢			浅				胴部	合計											
	A A A A A A					B B		C C C			D D														
	1 2 3 4 5 6					1 2		1 2 3			1 2														
個体数	43	6	3	6	5	5	33	13	30	9	17	4	11	7	3	6	3	5	0	3	3				
	112*					79*		55*			21		48*				8		6		1		74		
合計						267									63						74		404		

小計のうち*のあるものは、細分不能の個体をふくむ。

表24 中期末縄文土器の器種別縄文各種擦別個体数

器種	深					鉢			浅				胴部	合計											
	A A A A A A					B B		C C C			D D														
	1 2 3 4 5 6					1 2		1 2 3			1 2														
L R 縄文	35	5	2	3	4	1	16	9	16	5	7	16	4	6	4	2	2	1	0	0	2	0	33	246	
	82*					50*		31*			20*		27*						2		0		33		
R L 縄文	2	1	0	1	0	6	7	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	10	32	
	11*					8*		1			1		0				0		1		0		10		
無節縄文	2	0	0	0	1	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	18	
	6*					0		5			0		3*				0		0		0		4		
縄文なし	0	0	1	2	0	0	10	4	9	3	3	0	0	5	3	1	4	2	5	0	0	3		107	
	13*					21*		18*			0		18*				7		3		1		26		

小計のうち*のあるものは、細分不能の個体をふくむ。

Ⅰ・Ⅱ期を醍醐Ⅲ式、Ⅳ期を北白川C式と呼ぶことを提唱したが⁽¹⁴⁾、本資料の分析を通じてこれらが一連の土器であることを認め、前説を撤回して、北白川で出土した中期の土器という意味で北白川C式⁽¹⁵⁾なる名称をこの土器全体に付したい。Ⅳ期の細分については、若干の問題が残っている。Ⅱ期とⅢ期の細分はSBⅠ・SBⅡの資料が少ないことや、Ⅳ期への変遷が滑らかでない点など問題があり、Ⅳ期の土器については深鉢AⅥ類の位置付けを含め、磨消縄文の時期をもう1時期区別する必要性が生じてくる可能性もある。ここではⅣ期細分が、今回の資料の変遷を知る上での目安となる細分という程度に留めておきたい。

北白川C式の器種組成の比率について、今回出土した土器のうち、c5Ⅰ区、c5Ⅱ区b4Ⅳ区の黒色土Ⅰ下出土の土器について個体識別法で計算した(表23)。時期の異なる資料であるが、北白川C式として一括しうる内容であり、全体の傾向を示すことができると考える。深鉢は全体の81%、浅鉢は19%を占める。深鉢ではA類が42%、B類が30%、C類が21%、D類が8%であり、A・B・C類が深鉢の基本的な器種となっていることがわかる。浅鉢ではA類が全体の76%を占めるが、これは本資料がⅠ期の資料をほとんど含んでいないためであろう。粗製土器のD類が少ないことは後期との大きな違いである。

縄文の撚りおよび地文について各器種ごとの比率を検討した(表24)。全体としては、LRが全体の61%、RLが8%、無節縄文が4%、無文が26%である。RLの撚りは特定の器種すなわちAⅥ類とBⅠ類に多くみられる。AⅥ類は中津式を含む可能性があるのに対して、BⅠ類にはその可能性がなく、他の理由があるように思われる。無文地の土器が一定の割合を占めるのは、次の中津式の時期と比べて興味ある問題であると同時に、無文地の時期を中期最終末に設定する説に対しては否定的になる。

以上のように、北白川C式はそれまでの船元式・里木Ⅱ式とまったく異なって、浅鉢を基本的器種組成に加え、文様も一新した土器群であった。縄文の撚りもRLを基調とする縄文やLrの棒巻縄文からLRへと変化をとげている。これらの土器が東日本系の文様、器種組成、縄文等に起源をもつことは明らかであり、加曾利E式の第5段階、唐草文系土器のⅣ期に西日本への一挙的流入があったと思われる。この一挙的流入で北白川C式が成立し、その後は近畿地方独自の型式へと定着化したと考えることができる。

最後に北白川C式のⅣ期細分を、模式化した図108で示すことにする⁽¹⁶⁾。図108に示した土器は、小破片から推定した土器を多く含んでおり、あくまでも型式変遷の雰囲気を表したものであって、実在する土器の表示でない点をことわっておく。

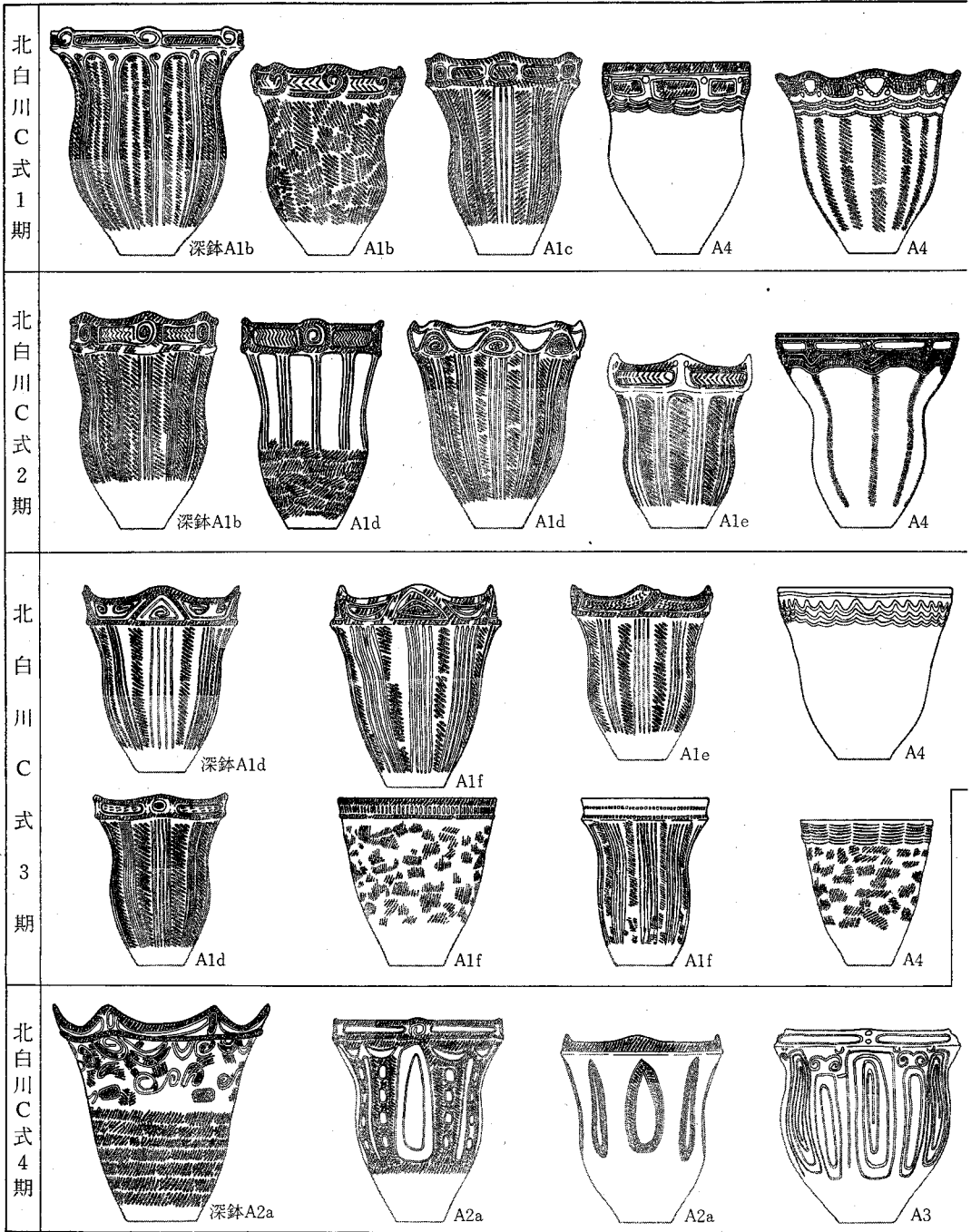
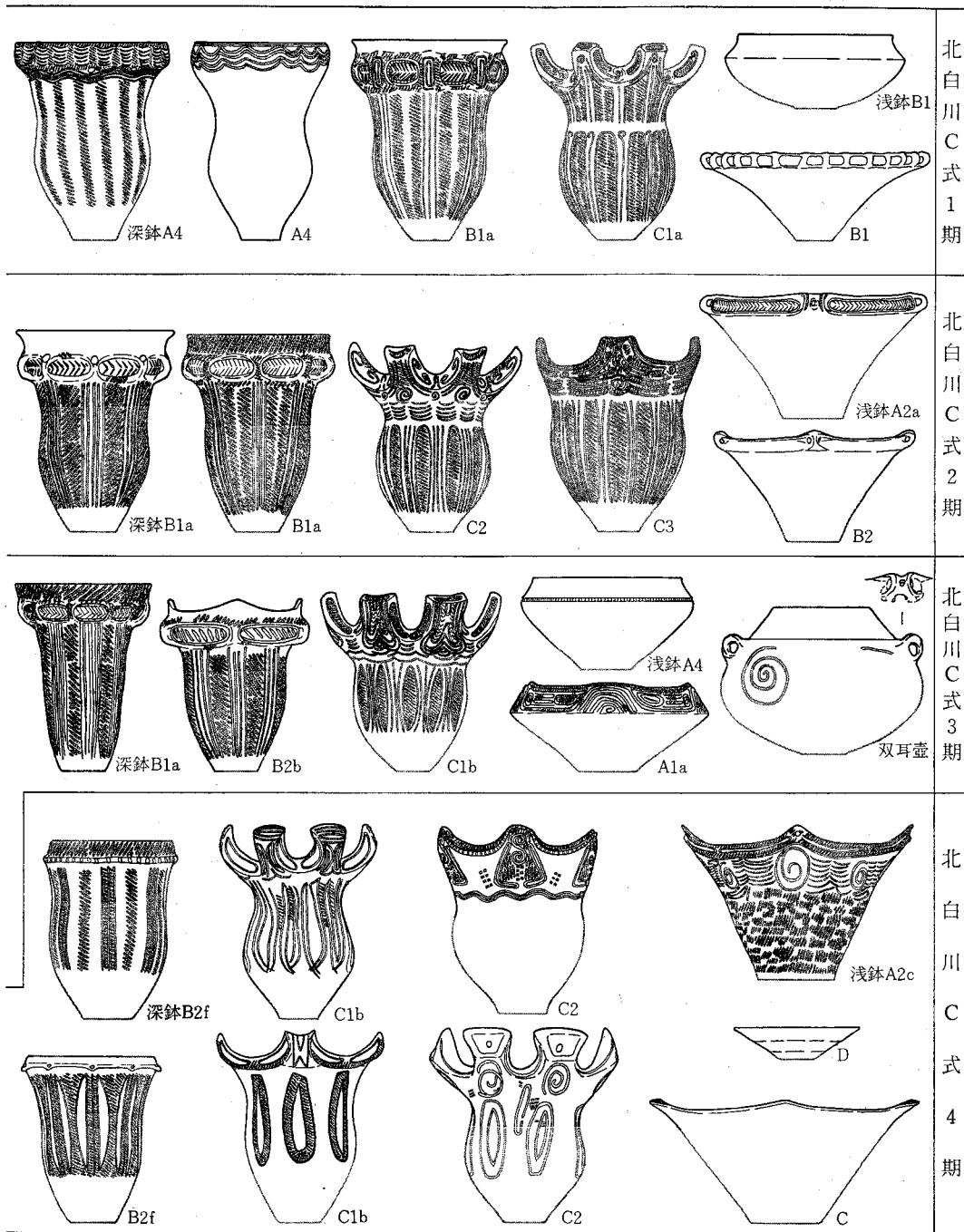


図108 北白川C式土器



変遷模式図 縮尺不同 (図中の淡線は推定部分を示す)

2 晩期末縄文土器の分析

泥炭質層およびそれと併行する斜面黒褐色土から出土した土器は多くはない。これらのうち泥炭質層3～4(第25～28層)は凸帯文土器を含まない滋賀里Ⅲb式期の所産である。また黄色砂直下の暗灰色砂質土(第11層)からは弥生前期後葉の壺が出土しており、この2つの層にはさまれた泥炭質層2下(第23層)～泥炭質層1最上(第14層)は縄文晩期から弥生前期にかけての時期に限定できる。これらの層から出土した土器は凸帯文土器であり、ここではその凸帯文土器の分析を主として、層位と型式との対応を明らかにしたい。

凸帯文土器の分類 すでに第Ⅰ部第3章で示したような凸帯の位置と形態、刻目の形態の分析をおこなう必要がある。⁽¹⁷⁾凸帯は、その形態によってa～c、口縁端部のつくりと凸帯のつく位置によって、1から4の要素にわけて分類し、全体としてはこの要素の結合した表現、すなわちa1型、a2型のようにローマ字と数字を併記して凸帯の種類を表わすことにした。以下で、まず要素の分類内容を示す。

凸帯の形態

- a型**：上下両方から押さえて施す凸帯，断面は▷型を呈する。
- b型**：上側からのみ押さえて施す凸帯，断面は◁型を呈する。
- c型**：下側から撫で上げるように施す凸帯，断面は◻型を呈する。

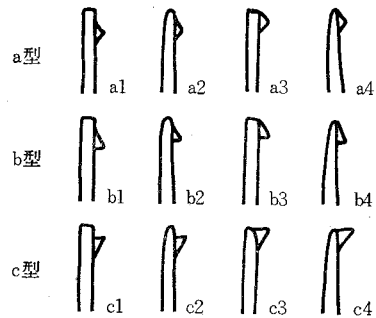


図109 凸帯の分類

凸帯の位置

- 1型**：面取りする口縁端部から下がって凸帯を施すもの。
- 2型**：面取りのない口縁端部から少し下がって凸帯を施すもの。
- 3型**：面取りする口縁端部に接するように凸帯を施すもの。

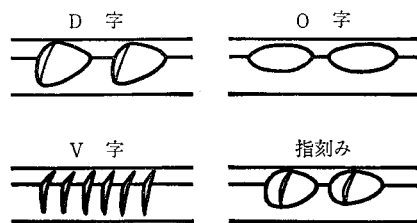


図110 刻目の分類

4型：口縁端部の面取りをせずに凸帯の貼付けと同時に調整をおこなうもの。

肩部の形態

I型：肩部の屈曲の程度が強い。

II型：肩部の屈曲の程度が弱い。

III型：肩部がほとんどみられない。

この分類にもとづいて、第I部第3章の土器を説明したが、ここでは図示しなかった遺物も含めて、各層ごと、もしくはひとまとまりの層ごとに分析を進める。

泥炭質層2上 32点の凸帯文土器があり、本資料の中では、もっとも数の多い資料である(表25)。深鉢は頸部がゆるくくびれるA類がほとんどで、口縁部の凸帯a型が多く、b型がそれに次ぐ。刻目ではD字が圧倒的で、次にV字が多い。肩部の凸帯は頸部の撫で調整が凸帯上面までおよんでいるb型が主で、それにD字刻目を施すことが一般的である。

白色砂4 泥炭質層2上と泥炭質層1下との間に入る白色砂から出土した土器で、11点と少ないが、泥炭質層2上とは若干異なった傾向を示す(表26)。深鉢はA類の器形を基調とし口縁部の凸帯はa型とb型が拮抗するようになり、凸帯の位置も口縁直下にくる4型

表25 泥炭質層2上出土の凸帯文土器

		凸帯	D	小DV	O	V	特殊	なし	不明	計
A類	a 2	3	1	0	1	0	1	0	0	6
	a 3	3	1	0	2	0	1	0	0	7
	b 3	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	b 4	3	0	0	0	0	2	0	0	5
	c 4	0	0	0	1	0	0	0	0	1
肩部	a	1	0	0	2	0	0	0	0	3
	b	6	0	0	1	0	0	0	0	7
B類	a 2	1	0	0	0	0	0	1	0	2
計		17	2	0	8	0	4	1	0	32

表26 白色砂4出土の凸帯文土器

		凸帯	D	小DV	O	V	特殊	なし	不明	計
A類	a 2	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	a 3	1	0	0	1	0	0	0	0	2
	a 4	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	b 1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	b 4	2	0	0	0	0	0	0	0	2
肩部	a II	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	a III	0	1	0	0	0	0	0	0	1
B類	b 4	0	0	0	1	0	0	0	0	1
計		5	3	0	3	0	0	0	0	11

表27 泥炭質層1出土の凸帯文土器

		凸帯	D	小DV	O	V	特殊	なし	不明	計
A類	a 2	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	a 3	1	1	0	1	0	0	0	0	3
	b 4	1	1	1	1	0	1	0	0	5
肩部	a III	1	0	0	0	0	0	0	0	1
B類	a 3	1	0	0	0	0	0	0	0	1
計		5	2	1	2	0	1	0	0	11

表28 斜面黒褐色土・白色砂1出土の凸帯文土器

		凸帯	D	小DV	O	V	特殊	なし	不明	計
A類	a 1	0	0	1	1	0	1	0	0	3
	a 2	1	0	1	0	0	0	0	0	2
	a 3	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	a 4	1	1	0	0	0	0	0	0	2
	b 4	1	1	0	2	1	3	0	0	8
肩部	a III	0	0	0	1	0	0	0	0	1
計		3	2	2	4	1	5	0	0	17

の増加がみられる。しかし刻目ではD字が過半数近くを占め、それほどの減少はみられない。肩部は凸帯貼付後の調整に手ぬぎがみられるa型が増加している。

泥炭質層1 出土遺物は少なく、数層に分層した土器を一括した。その組成はほとんど白色砂4と区別できないが、凸帯の分類ではb4型が主流になること、O字刻目が出現するなど、次の斜面黒褐色土および白色砂1の土器につながる要素が加わっている(表27)。

斜面黒褐色土・白色砂1 斜面黒褐色土は層的には不安定であったが、分析の結果、凸帯文土器だけにしぼってみるとひとつの傾向を示した。凸帯はb型で口縁下につくb4型が主で、刻目もV字や刻目なしが多い。すなわち泥炭質層1に現われた新しい傾向がより強まったものと理解できる。白色砂1も同様の傾向を示したので、表28は両層を一括した数値で作成した。

以上のように、詳細に分析を進めると凸帯文の分類で各層がそれぞれ少しずつ異なっており、一定の変化の傾向を示すことが明らかになったと思われる。

(1) 近畿地方の凸帯文土器

近畿地方では凸帯文土器を滋賀里Ⅳ式、船橋式、長原式の3時期に区分している。ここでは、それらの深鉢である凸帯文土器について考察をし、前述の分類との対応を示す。

滋賀里Ⅳ式 口縁端部から下がったところに、1条の刻目凸帯を施す。凸帯はa型、刻目は筥状工具をねかせて施すD字刻目が一般的である。口縁端部は面取りをおこない、滋賀里遺跡を例にとれば、その約4分の1が刻目をもつ。⁽¹⁸⁾瀬戸内地方では口縁端部の刻目は過半数におよんで⁽¹⁹⁾いる。

船橋式 大阪府柏原市船橋遺跡出土資料を分析した⁽²⁰⁾。凸帯の主体をなすのはa2型である。他にa1型、a3型、b1型、b4型があるが、滋賀里Ⅳ式の中心をなすa

表29 大阪府船橋遺跡出土の凸帯文土器

	凸帯	D	小D	V	O	特殊	なし	不明	計
A類	a1	0	3	0	1	0	1	0	5
	a2	12	2	0	0	0	2	0	16
	a3	5	0	0	0	0	2	0	7
	b1	3	1	0	0	0	0	0	4
	b4	2	0	1	1	0	0	0	4
肩部	a	2	0	0	0	0	0	0	2
	b	1	0	0	0	0	1	0	2
B類	a2	1	2	0	0	0	0	0	3
	b4	0	0	0	0	0	1	0	1
計		26	8	1	2	0	7	0	44

表30 大阪府長原遺跡出土の凸帯文土器

	凸帯	D	小D	O	小O	小V	なし	不明	計
A類	a2	6	2	0	2	0	1	7	18
	a3	2	3	1	4	1	0	0	11
	a4	4	17	1	12	17	18	25	94
	b3	0	2	0	4	2	2	1	11
	b4	3	16	1	11	7	7	14	59
肩部	c4	3	14	1	3	3	2	14	40
	a	9	68	13	17	23	2	65	197
肩部	b	5	6	1	0	5	3	6	26
	計		32	128	18	53	58	35	132

I型は少ない。刻目はD字が最も多く、小DV字と刻目をもたないものがこれに続く。船橋式のD字刻目は、滋賀里Ⅳ式のD字刻目とは異なって、凸帯上に篋状工具を滑らせながら刻む横方向に長いD字刻目である。なお、口縁端部に刻目をもつ土器は存在しない。したがって、船橋式は口縁端部から面取りが失なわれるのが特徴で、凸帯ではa2型、刻目に関しては横長のD字と小DV字を主体としている。肩部の凸帯は例数が少ないが、後述する長原式と比較してb型の多い点の特徴である。深鉢の器形では砲弾形をなすB類の凸帯文土器が1割弱みられる点も滋賀里Ⅳ式とは異なる。また1条と2条の凸帯文土器が混在するのも特徴である。

長原式 大阪市長原遺跡の資料を分析した(表30)⁽²¹⁾。凸帯では、口縁端部の調整と凸帯の貼付けを同時におこなうa4、b4、c4の各3型が主体をなす。刻目に関しては、小D字、小O字、小V字のような軽い刻目が主体を占めており、この点が長原式の際立った特徴となっている。刻目をもたない凸帯の存在も刻目の手ぬぎが主である長原式においては、より評価する必要がある。肩部の凸帯は、頸部と調整を異にする、もしくは頸部の調整が省略されるa型の凸帯がほとんどである。

以上の3型式の変遷をみる。滋賀里Ⅳ式では口縁端部を面取りして刻目を施すが、船橋式になると面取りや刻目が省略され、さらに船橋式では別々におこなっていた凸帯の貼付けと口縁部の調整を、長原式になると同時におこなうようになり、技法の簡略化という一定方向の変化が追跡できる。また、刻目についても、滋賀里Ⅳ式では篋でしっかり刻んでいたD字が、船橋式では篋を横滑らしに施して施文回数を減じ、長原式にいたっては刻み自体が微かになるという技法の手ぬぎと考えられる推移が存在する。これらは連続的变化と考えられ、数値的に表現されるものである。

(2) 出土凸帯文土器の編年位置

前項で検討を加えた滋賀里Ⅳ式、船橋式、長原式への変遷の中に、今回出土した資料を位置付ける。

泥炭質層2上出土土器は、凸帯b型ではb4型が卓越するものの、a型ではa2型、a3型がすべてであり、船橋式の特徴を備えている。肩部凸帯にb型が多い点も船橋式の特徴であり、刻目がD字を主体としてこれにV字と小DV字が続く点も船橋式を逸脱しない。泥炭質層2下出土土器は2上出土土器と型式学的な差異はなく、ほぼ同時期と思われる。

白色砂4出土土器、泥炭質層1出土土器は全体としてb4型凸帯の増加と、D字刻目の減少がみられるものの、基本的には泥炭質層2上と大きな変化はなく、船橋式の範疇に入

と思われる。しかし、とくに泥炭質層1ではb4型凸帯が主体をなし長原式への強い傾斜が認められる。

斜面黒褐色土と白色砂1出土土器は、b4型・a4型の凸帯が全体の約 $\frac{2}{3}$ を占め、刻目もO字やV字、刻目なしなどが主となって長原式に近い内容をもつ。

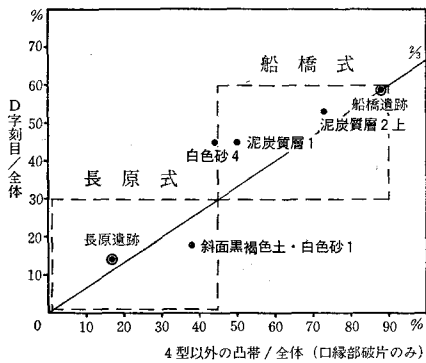


図111 刻目と凸帯の型式による変遷

これらをD字刻目の比率と1～3型凸帯の比率との相関図にしてみると、変化の様相がよく理解できる。1～3型凸帯でD字刻目の多い船橋式から、順々にその比率を減じる様相がわかり、さきに型式学的に予測した対応がさらにはっきりしよう。すなわち泥炭質層2下～1は船橋式、斜面黒褐色土、白色砂1は長原式併行と理解できる。

以上中期末と晩期末とにわけて考察をおこなったが、中期末については泉拓良が、晩期末については家根祥多が執筆し、泉が両者の調整をおこなった。

なお本文を書くにあたっては宮本一夫氏、玉田芳英氏の御協力を賜わり、また西日本縄文文化研究会、右近次郎遺跡出土土器検討会において参加の諸氏から貴重な御助言をいただいた。文末ながらここに記して感謝する次第である。

さらに、坪井清足、釋龍雄、岡崎正雄、市村高規の諸氏と大阪市立博物館には、未発表の資料の掲載を、ご快諾いただいた。あわせて感謝する次第である。

〔注〕

- (1) 泉拓良「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集1 日本原始』1979年
- (2) 安孫子昭二・秋山道生・中西充一「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」『縄文時代中期後半の諸問題』（『神奈川考古』第10号）、1980年の7期区分による第V段階にあたる。いわゆる加曾利E2式の末ごろである。
- (3) 埋蔵文化財天理教調査団『布留遺跡の調査——縄文遺跡の調査より——』1984年（現地説明会資料）p.3 図左下の土器。
- (4) 横山浩一・佐原眞『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第1部 日本先史時代』1960年 p.244 写真030-g 左上の土器。
- (5) 大江幸『炉畑遺跡発掘報告書』1973年 図版36Bの土器。
- (6) 遮那藤麻呂・金正彦「増野新切遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——下伊那郡高森町地内その2——』1973年 p.155 第72図1の土器。
- (7) 梅原末治「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第5冊、1923年

- (8) 梅原末治「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第16冊, 1935年
- (9) 梅原末治「北白川上終町史前住居遺跡」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第16冊, 1935年
- (10) 横山浩一・佐原眞『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第1部 日本先史時代』pp. 191-192, 1960年
- (11) 清水芳裕「京都大学北部構内B F 33区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年
- (12) 中村徹也『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』Ⅰ, 1974年
中村徹也『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』Ⅱ, 1975年
- (13) 出土地点は明らかでないが、恐らくB F 33区とB G 31区との間にある東西道路部分からの出土と推定している。
- (14) 泉拓良「西日本縄文土器再考 ——近畿地方縄文中期後半を中心に——」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』1982年。この論文は1976年に提出したものである。
- (15) 4期の土器について、今村啓爾は「全く便宜的に」平式という呼び名を用いている（「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第67巻第2号, 1977年）。したがって、4期の土器を平式とすべきかもしれない。しかし、京都府平遺跡出土の土器は（堅田直『京都府丹後町平遺跡調査概要』, 1966年）、深鉢A類ではA 3類を主体とし、深鉢B類・浅鉢A類がほとんどみられないなど、近畿地方中央部の土器群と異なり、鳥取市桂見遺跡（鳥取市教育委員会『桂見遺跡発掘調査報告書』1978年）に類例を求めることができる。よって、この時期の近畿地方中央部の土器群は、それ以前のつながりから北白川C式4期と呼称することにしたい。
- また、北白川C式という用語は三森定男が北白川小倉町遺跡出土の条痕文土器に対して用いたことがある（『先史時代の西部日本(下)』『人類学先史学講座 第3部 日本及び隣接地の先史学』第2巻, 1938年）。しかし、この用語はそれ以後用いられたことはほとんどなく、ここであらためて北白川C式中期末の土器群に対して用いても不都合がないと考えられる。
- (16) 図108は本書に掲載してある土器のほか、以下の文献に掲載してある土器を用いて、推定復原をおこなった。
- 小江慶雄「琵琶湖の湖底遺跡」『京都教育大学紀要 A(人文・社会)』第30号, 1966年
- 岡田茂弘「近畿」『日本の考古学 Ⅱ 縄文時代』1965年
- 奈良国立文化財研究所「大官大寺下層遺跡の縄文式土器」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』8
1978年
- 松崎寿和・間壁忠彦「縄文後期文化 西日本」『新版考古学講座 3 先史文化』1969年
- 埋蔵文化財天理教調査団『布留遺跡の調査——縄文遺跡の調査より——』（現地説明会資料）
1984年
- (17) 家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』1984年
- (18) 田辺昭三『湖西線関係遺跡発掘調査報告』1973年
- (19) 間壁忠彦・間壁霞子・藤田憲司・小野一臣「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号,
1979年
- (20) 田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原眞『船橋Ⅱ』1958年
- (21) 家根祥多「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』1982年